

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2013年12月5日（木）

場 所：名古屋キャンパス N棟3階 社会倫理研究所 会議室

テーマ：Cosmopolitan Bataks in Tarutung, North Sumatera

報告者：Dr. A. Budi Susanto S.J. (サナタデルマ学園財団理事長)



インドネシアでは、約200の地方語がそれぞれのエスニック集団によって話されているが、その多様な民族集団をつないでいるのは共通語（Lingua Franca）のインドネシア語である。北スマトラ州を中心に居住しているバタック人は、インドネシアではジャワ人、スダ人仅次于人口規模（約880万人：2010年統計）を有する。バタック人内部では、Batak Angkola（州南部）、Batak Karo（トバ湖北方）、Batak Mandailing（州南部）、Batak Pakpak Dairi（トバ湖西方）、Batak Simalungun（トバ湖東方）、Batak Tapanuli/Sibolga（インド洋側）、Batak Toba（トバ湖南方：最大集団）と分類されるが、近年バタック人自身はこのような区別した呼び方をしなくなっている。

トバ・バタックが他者および他のバタックとの経済交渉で銘記すべき格言に「Dalihan Na Tolu（三つの囲炉裏石）」がある。これは、妻与側の親族、妻受側の親族、同族集団の親族に対して互恵関係を保つことの重要性を説いたものであるが、現在でもバタックの人々の知恵として生きている。

19世紀後半この地域では、オランダ植民地支配が強化され、多国籍形態の企業（タバコプランテーション）が活動するようになり、さらに、プロテスタント宣教がバタック社会に導入された。グローバルな世界とのつながりができたのである。現在では北スマトラ州ではムスリムとプロテスタントがそれぞれ約半数を占める。インドネシ

アでは国民の大多数がムスリムで、他の宗教的少数派は地域的に偏在しているが、ふたつの宗教がこのように拮抗する地域はきわめて限られている。コスモポリタンとはこのように異なる文化に接している人のことを指すのであり、世界を旅行した人を指すのではない。

タパヌリ県の中心都市タルトゥンには1864年に最初のプロテスタント教会が建てられたが、この町は現在では「宗教ツアー」で知られている。宗教的史跡はタルトゥンの人々が異なる文化に接してきたことを示すと同時に、それにどう対処してきたか、つまり他者との交渉のあり方をシンボルで記号化して提示している。これは実生活ではどのように実践されているだろうか。

例えば、街中の食堂は国際的な中華料理店、土地の食べ物が食べられる食堂に分類されるが、前者はChinese Foodと明示されるか、「Bahagia (幸せな)」という抽象的な名称で示される。一方、ムスリムが食することができるメニューの食堂には、「イスラーム」がわかる表示をしてある。またバタック独特の料理とされる豚肉や犬肉を出す食堂は、「キリスト教」ではなく、「Khas Tapanuli (タパヌリ・スペシャル)」「Batak」のように郷土料理として示したり、独特の文字記号 B1 (犬 <Biang>), B2 (豚 <Babi> を指す) で示されたり、あるいは犬の絵でもバタックにはいない種類の洋犬で表されたりする。また、クリスマスに際しては、ムスリムも「クリスマスおめでとう」の横幕を掲げてともに祝うことが習慣化している。

こうして、外部からの異文化に接してきた経験はその異文化をこの地に同化させると同時に、他者をいたずらに刺激しないで共存をはかる、相互尊重の精神をはぐくんできた。これこそが、タルトゥンの人々をコスモポリタンにしている。

(文責：小林 寧子)